第４回

トリエンナーレ

自由の女神 アート作文コンクール

受賞作品集

令和二年　三月十五日

テーマ：「わたしの誇(ほこ)り」

ごあいさつ

ニューヨーク・マンハッタンの片隅に四十年前、小さな日本人学校が設立されました。それがJapanese Children's Society ニューヨーク育英学園です。人格形成期として大切な幼児部、小学部の一貫教育にて日英のバイリンガル教育を謳いつつ、「日本語、日本文化を大切にしよう。」と主張している学園です。その学園が創立三十周年を機に三年に一度のトリエンナーレ「自由の女神アート作文コンクール」を開催しています。第四回目を迎えます今回は「わたしの誇り」というテーマで作文と絵画の公募をしました。世界のアートの中心地ニューヨークということもあり六百から七百点と回を追うごとに集まる作品も多くなっています。子ども達の充実した生活の日々を感じられる文や絵に「さすが現代に生きる子ども達！」と感心しています。世界各地で健気に生きる幼い子ども達。将来、世の中の中心に立つであろうと彼等が何を見て、どう感じて、何を考えているのか、その表現を通してご理解ください。

この度も在ニューヨーク日本国総領事館とニューヨーク日系人会のご協力により表彰式と展示会を持つことが出来ました。厚く御礼申し上げます。又、日本語検定委員会、平山郁夫シルクロード美術館の温かいご後援により作文と絵画の賞を持つことができました。さらに、海外子女教育振興財団のご後援により今回も多くの作品が集まりました。そして今回はコーリン・ジャパニーズ・トレーディングコープの川野作織社長のお申し出により賞品も出るようになりました。子ども達の笑顔が目に浮かびます。

私たちの学園は海外の一私学ではありますが微力ながらも末永くこのトリエンナーレを続けていこうと考えています。

過日、本学園は創立四十周年を迎えました。これからも、子ども達一人ひとりのニーズに合った教育機関として、子ども達の将来の為に邁進してまいります。

皆様の温かいご支援をよろしくお願い致します。

二〇二〇年三月十五日

ニューヨーク育英学園

学園長　岡本徹

～「作文部門」　目次～

自由の女神日本語検定委員会大賞

「わたしは五人のおねえさん」　栗田　夏帆（小一）・・・

高等学校の部

金　賞　（該当者無し）

銀　賞　「紙一重」　ベルタキーニ　ニーナ（高二）・・・

作文部門グランプリ　自由の女神　日本語検定委員会大賞

I'm the Eldest of Five, Natsuho Kurita
George Washington school, NJ

わたしは五人のおねえさん

小一　くりた　なつほ

はじめて『たかなっち』にあったときのことをよくおぼえている。あさおきたら、サルのぬいぐるみが二つあって、「一つは小さい女の子にあげるんだよ。」といわれたから、わたしはピンクの子をえらんだ。ふわふわで小さい、かわいいサルのぬいぐるみを、わたしはすぐにきにいった。「これは、いもうとのたかなちゃんだよ。」

ニューヨーク育英学園

と、おとうさんがいったから、わたしは『たかなっち』とよぶことにした。

そのすこしまえまで、おかあさんのおなかにはあかちゃんがいた。おかあさんのおなかはとても大きかった。でもある日、「あかちゃんはもうちょっと、おそらの上でのんびりすることにしたんだって。」と、おかあさんにおしえられた。ずっとたのしみにしてたからがっかりしたけど、いもうとのかわりにたかなっちがきてくれた。

たかなっちとわたしは、それからいつもいっしょだ。ごはんもいっしょにたべたし、たまにおふろにもいっしょにはいった。おかあさんもたかなっちのこえをだしてくれた。たかなっちはかくれんぼがとくいだ。いもうとっていいなとおもったら、よけいにあかちゃんがほしくなったけど、なんとなくおかあさんにはいえなかった。

そのあと、ほんとうにあかちゃんがやってきた。でも、こんどはすぐにいなくなってしまった。かわりにまた小さなサルのぬいぐるみがやってきた。

ニューヨーク育英学園

あかちゃんはどうしてしんでしまうんだろう。生まれてきたらいっぱいあそんであげるのに。

そのあとまたあかちゃんがやってきたとき、わたしはしんぱいなきもちでいっぱいになった。またいなくなってしまうかもしれないとおもったら、よろこんでいいのかわからなくて、まいにちドキドキした。だからよく、き

かいをつかって、あかちゃんのしんぞうの音をきいた。ショワンショワンというおかあさんのちの音のなかに、トットットットと早音がして、たまにあかちゃんがうごくみずの音がした。それをきくと、とてもうれしいきもちになった。こんどはげん気だ。

そしてついに『おみくん』が生まれた。はじめてあったときからずっと、すごくかわいい。さいきんはトコトコあるくようになった。へたっぴなあるきかたがまたかわいい。わたしが「ワッ！」っていうと、キャッキャとわらう。おみくんをわらわせるのは、おかあさんよりわたしのほうがずっととくいだ。

このなつ、こんどはあかちゃんが二人いっぺんにやってきた。ぜったいにうまれてほしいとおもったけど、またしんでしまった。そして、こんどはいのししのぬいぐるみが二つ、ふえた。

いっしょにあそべるのは一人だけどうちには四人のぬいぐるみがある。いつもいっしょだ。五人もきょうだいがいる子はしらない。わたしはそんなみんなのおねえさんになれたことを、とてもじまんにおもう。だからわたしは、おみくんだけじゃなくて、お空の子たちもたくさんあらわせられる、みんなのじまんのおねえさんでいたい。

ニューヨーク育英学園

「わたしは五人のおねえさん」という題からは、すごいなあ、たくさんの兄弟がいる幸せで大きな家族のお話なのかな、と誰でも思うでしょう。でも、それが悲しいお話だったとは・・・。

最初の書き出しには、読む人をぐっと引き付ける力があります。

声を入れたり様子をしっかりと書き込むことによって、お父さん・お母さんのなつほさんへの気遣い、生まれることなく死んでいった赤ちゃんへの思いやりが伝わります。なつほさんの、赤ちゃんを失ったおかあさんへの思いやりも、読者に具体的に伝わり涙を誘います。

「あかちゃんはどうしてしんでしまうんだろう」というなつほさんのつぶやき、赤ちゃんが無事に生まれてくるということが、実は本当に大変なことなのだということが分かります。

なつほさんはこれからも、お空に行った四人のぬいぐるみを大事に、五人のお姉さんとして、家族の絆を心にしっかりと持って、生きていくことでしょう。

家族同士、お互いを思いやる心が伝わる素晴らしい作品でした。

小学校低学年の部　金賞

I Love to Sing, Yuna Ito
Stratford Road Elementary school, NY

歌が大好き

小二　いとうゆうな

わたしのほこりは、歌です。わたしは、歌を歌うことが大好きです。

さみしいときもつらいときも、わくわくなときも楽しいときも、うれしいときも元気なときも、いつも歌を歌っていると、気もちが歌の中に入っていって、いつのまにかむ中になります。

うれしいときに歌うと、あたたかい色とかるいリズムが出てきます。かなしいときは、青とかみどりとかのこい色が出てきて、体の中から力が出てきます。

わたしが歌うことで、だれかが楽しく、しあわせな時間をすこしでも、もてたらうれしいなと思っています。

これがわたしのほこりです。

ニューヨーク育英学園

ゆうなさんが、どんなに歌が好きなのか、短い文の中にそれがよく書かれています。
「うれしい時には暖かい色を感じ、軽いリズムが出て、悲しい時には青とか緑の色とかが出てきて、体の中から力が出てくる」
と、歌が体の中から湧き出てきたものだと分かります。
これからもゆうなさんの歌が色々な人を幸せにすることを期待しています。

What I Care for, Aoi Niwa
Japanese Children's Society, NJ

小学校低学年の部　銀賞

たいせつにおもうきもち

小一　にわ　あおい

わたしのほこりは、おとうとたちをたいせつにおもうきもちです。

わたしには、ふたごのおとうとがいます。おとうとたちは、まだ小さいです。すぐないたり、おこったりします。おとうとたちがにこにこでいられるようにがんばっています。

ゲームをやっているときにわざとまけてあげたり、きょうそうしているときにさきにいかせてあげたりします。

おやつのときは、大きいほうをおとうとたちにあげます。

おとうとたちのきげんがわるいときは、おとうとたちがよろこぶことをしてあげます。へんなかおをしてわらわせてあげます。

こういうことをしてあげると、おとうとたちは、よろこんでくれます。おとうとたちは、

「ねぇね、大すき。」

とだきついてくれます。

ニューヨーク育英学園

おとうとたちがにこにこしてくれるとうれしいです。おとうとたちをたいせつにおもうきもちは、じぶんでもすごいとおもいます。いいことにおもわれたくてかわいがっているのではなくて、ほんとうにおとうとたちのことがかわいいからいろいろしてあげたいとおもっています。

ニューヨーク育英学園

これからもおとうとたちをたいせつにおもうきもちをだいじにしたいです。

ニューヨーク育英学園

お姉さんとして双子の弟を大切に思い、色々とお世話をしてあげる様子が詳しく丁寧に書かれています。そして、幼い弟たちにもお姉さんの優しさが伝わり、「ねえね、だいすき。とだきついてくれます」という言葉で、読者にもほのぼのとした温かさが伝わってきます。

My Three Pin Badges, Sena Donnelly
Joseph A. Edgar Intermediate School, NY

小学校低学年の部　銅賞

ぼくの三つのピンバッジ

小二　ドネリー　せな

ぼくは、きょ年日本ご学校で、しょうじょうとピンバッジを、いっぺんに三つも、もらいました。一年生の五十メートル走と走りはばとびがニばんで、ボールなげが一ばんだったからです。ピンバッジは、金色とぎん色でした。まん中にりんごの絵がありますす。きらきら光って、とてもきれいです。これがぼくのたからものでじまんです。

ニューヨーク育英学園

ぼくは、きょう走の日の一月前からはやく走るれんしゅうや、とぶれんしゅうをしました。兄がきょうあいてになってくれました。でき

るだけうでをふって大またに、走れれんしゅうをしました。テレビでオリンピック金メダリスト、ボルトせんしゅのようにはやく走れるトレーニングをやっていたので、そのれんしゅうとしました。走りはばとびは、じめんに線をつくって、れんしゅうしました。お母さんが

ニューヨーク育英学園

「とんだら、りょうほうの手をあげて。大きくむねをそらして、とおくを見たほうがいいよ」。

と、教えてくれたので、体いくの時間にその通りにしたら、とおくにとべました。ちゃくちしたとき、ちょっとふらふらして、前にころびました。きろくは、二メートル八十センチでした。

うちで、きょうそうのけっかを見たとき、

「うわぁ！やった！」

と、さけびました。ベッドの上で、とび上がりました。

しゅうぎょうしきで、みんなの前で、体いくの先生に名前をよばれた

ニューヨーク育英学園

時、とてもうれしかったです。三つのきょうそうで、一いとこいだったので、三回名前をよばれました。

きょうしつに、もどった時、先生がしょうじょうとピンバッジをくれました。ぼくはなくさないように、すぐにふでばこの中にしまいました。休み時間にクラスの友だちに、

「見せてくれる？」
と、言われたので、見せてあげました。気もちよかったです。

ニューヨーク育英学園

五十メートル走、走りはばとび、ボール投げと、三つもピンバッジをもらうことができておめでとう。
競争の日に向けて、お兄さんお母さんの協力もありみんなで頑張った様子がとてもよく書けていて、感心しました。
その努力の結果が出てほんとによかったなあと思いました。

On the Stage in Spain, Rizu Kasama
Japanese Children's Society, NJ

小学校中学年の部　金賞

スペインのステージで

小三　笠間　リヅ

ステージの上で、マリアさんの横に立つ私には、スポットライトがあたっています。緊張する私に、お客さんが温かい拍手を送ってくれます。この時、私は目標を達成できたことを実感し、自分を誇らしく思っていました。
去年、私が通うニューヨーク育英学園にトマレス少女合唱団が来校し、スペイン語の歌や英語の歌、日本の歌を歌ってくれました。

ニューヨーク育英学園

私はお姉さん達の美しい歌声に感動しました。そして次は日本の子供達がスペインを訪問する計画だという話を聞き、ぜひ私もスペインに行って、もう一度このお姉さん達と一緒に歌いたいと思いました。この目標を達成するため、私はまず風の環少年少女合唱団に入団し、スペインに行くメンバーを決めるオーディションを受けました。そしてそれに合格し、練習を重ね、スペインでの交流活動に参加できることになったのです。

スペインでは、トマレス合唱団指揮者のマリア・エレーナさんが色々なところで同席してくれました。ある時、私は勇気を出してお母さんと一緒にマリアさんに英語で話しかけてみました。トマレス合唱団の歌声を聞いて感動し、スペインに来るために、風の環少年少女合唱団を探して入団し、オーディションを受けて合格し、たくさん練習して、やっとスペインに来ることができたということを話しました。するとマリアさんはとても喜んでくれました。そして、同行のカメラマンさんにたのんで、一緒の写真をとってくれました。

スペインでの活動のしめくくりは、トマレス合唱団との合同コンサートでした。私は、そのコンサートを一番楽しみにしていました。コンサートでは、まずトマレス合唱団が歌いました。この時も、お姉さん達の歌声にあらためて感動しました。次に、現地の合唱団が歌いました。そして、最後に私達の合唱団が歌いました。歌い終わり、私達がまだステージに残っている時、マリアさんのスピーチが始まりました。しばらくすると、マリアさんは私に手招きをして、横に立たせました。訳が分からず、私は緊張してしまいました。でも、うれしかったです。マリアさんは、数日前に私達が話したことを観客の皆さんに伝えてくれ、少し感極まった様子で「音楽が子供達の心をつないだ」と言ってくれました。すると客席から大きな拍手が巻き起こったのです。スペイン語だったので、その時はよくわかりませんでした。でも、大きな拍手を聞きながら、育英学園でのトマレス合唱団との出会いから、その日までのことを思い出し、私はとても幸せな気持ちになりました。

私は、スペインでもう一度お姉さん達と一緒に歌うという目標を達成できたこと、そしてそのために、精一杯がんばった自分を誇りに思います。これからも、人との出会いを大切にして、色々な事に挑戦していきたいと思います。

ニューヨーク育英学園

ニューヨーク育英学園

スペインの合唱団と一緒に、スペインの舞台で歌いたいという目標に向かって、風の環少年少女合唱団に入団し、オーディションを受け、練習を重ねて夢をかなえるまでの経過が、大変美しい字で丁寧にしっかりと書かれた素晴らしい作品です。

小学校中学年の部　銀賞

What Cello Means to Me, Alyssa Sugiyama
Buckley Country Day School, NY

小三　杉山　アリッサ
ニューヨーク育英学園

私にとってのチェロ

「そろそろチェロの練習の時間だ」。

夏休み中、おじいちゃんとおばあちゃんの家がある神奈川県の湘南で一泊のキャンプへ行った日の夕方、私はそう思っていた。もちろん、キャンプにチェロは持ってきていない。この二年間、ほぼ毎日お母さんと一緒に練習をしてきたチェロ。練習しない日なんて、何ヶ月ぶりだろう。

私はふだん「今日はチェロの練習したくないな」と思うことがある。それなのに初めて家族とはなれてのキャンプで、一晩練習ができないだけでそわそわして落ちつかない。その時私は、「チェロは今では自分の一部なんだ」と、気がついた。

私は二年前の九月、六才の時にチェロを習い始めた。ニューヨークで通う小学校の音楽の先生がチェリストだったので、レッスンをしていただくことになった。私の目の前で、ゆうがにチェロを弾く先生。まるで女神の歌声のような、やさしい音で弾く。

習いたてのころの私は、チェロを両ひざではさむのがやっとだった。指で弦をはじくピチカートでさえ、指先がいたくてむずかしく止めたくなった。「きらきら星」を、チェロで弾くのが、どうしてこんなにむずかしいのだろう。弓はぐらぐらするし、左手で弦を押さえようにも、指が満足に開かない。

そのころ、家でお母さんと練習をしながら何度も泣いた。先生の言うことが何一つできない。指先の皮がむけていたい。がんばっているのに。すべてが上手くいかない。

そんな毎日に変化がおき始めたのは、練習を始めて三ヶ月くらいしたころだった。少しずつだけど、音が出るようになっていった。弓を上手に持つために、毎日百回やっていた指の体操の効果が出てきたのかもしれない。このころはっきりと、「毎日あきらめずに練習を続ければ、できないと思った事でもでき

何度も泣きながら、指の皮がむけても毎日チェロの練習を続けたアリッサさん。二年間の日々の中でおきた変化の一つひとつを大切に言葉にして、あきらめずに続けることの大切さを学び、気持ちを素直に表現できた感動的な作品です。

るようになる」と思った記おくがある。練習中に泣く事も少なくなった。宿題の曲も合格をもらえるようになってきた。「あきらめないでがんばると、楽しくなっていく」と、チェロが教えてくれ、私はチェロが好きになっていった。

私は今、夏休みで日本のおじいちゃんとおばあちゃんの家に来ている。日本で練習するためのチェロは、おじいちゃんが借りてくれた。お母さんは、毎日練習に付き合ってくれる。私と同時にチェロを始めた五才の妹は、私のチェロの仲間だ。私たちの弾くチェロの横で、二才の弟が弓の動きをまねて、手をふる。

多くの愛情にかこまれて、私はチェロを弾いている。チェロは、あきらめない事の大切さを私に教えてくれた。私は今日も明日も、うまく言葉に出来ない私の気持ちを、弓にこめる。そんなチェロに出会えた事が、私のほこりだ。

ニューヨーク育英学園

Momotaro-Ichiza, My Volunteer Performing Arts Group, Taiyo Habu

P.S. 99 - Kew Gardens, NY

小学校中学年の部　銅賞

もも太ろう一座

四年　羽生　太陽

ぼくは、三さいのころから、ボランティアを続けています。

毎年、夏休みには、ぼくのおばあちゃんがいる岡山へ遊びに行きます。その時に、週に一回位二か月間、ろう人ホームや、お祭りで、皿回しや、手品をやります。

皿回しとは、とんがっているぼうを持って、皿をぼうにのせて、くるくる回します。これは、ぼくのおばあちゃんに教えてもらいました。ぼくはすぐ出来るようになりました。ボランティアには、八人で行きます。ぼく達のグループ名は、「もも太ろう一座」です。他のみんなは、カラオケ、日本ぶよう、フラダンスや、「長生きサンバ」という体そうをします。さい後は、みんなでぼんおどりをします。メンバーの中で、子どもはぼく一人です。他は、ぼくのおばあちゃんとその友達です。

皿回しには、色々なわざがあります。「千鳥

ニューヨーク育英学園

のまい」「おおぎのまい」「大皿回し」「五色のまい」「つばめ返し」「かさのまい」、「ひばりのまい」などがあります。いっぱい練習すれば、こつをつかんで、すぐできるようになりました。

最しょは、自こしょうかいから、始めます。ぼくのたんとうは、ほとんどが皿回しですが、なお間のアシスタントをしたり、手品をしたりします。手品は、ハンカチを投げると、スティックにへんかします。これは、ぼくのおばあちゃんの友達から習いました。手品より、皿回しの方がむずかしいです。皿回しは、一本のぼうから、最高かた手で、五まい回します。お皿をかさにのせたり、お皿をおおきい動させたりします。直ければ、四十センチもある大皿も回せます。時どき失敗もします。一番むずかしい所は、五枚のお皿を回す「五色のまい」です。ぼくが一番とく意な技は、「つばめ返し」です。これは、皿回しの間に、お皿を上にあげてぼうを回転させて、回っているお皿を、ぼうにもどします。

ボランティアのさい後には、おじいちゃんおばあちゃん達にあくしゅをします。みんなが、「よくがんばったね。」と言ってくれて、ぼくはすごくうれしい気持ちになります。「また来てね。」と言ってもらうと、ぼくはこれからも、ボランティアをずっと続けたいと思います。

三才のころから続けている「もも太郎一座」でのボランティアの経験が、とても詳しく、また分かりやすく書かれています。そこで受けついだいろいろな伝統の技は、太陽さんの大切な宝物として今後も誇りにして続けていってほしいです。

小学校高学年の部　金賞

My Books, Yuuki Donnelly
Rocky Point Middle School, NY

僕の本たち

小五　ドネリー　優希

今、僕の部屋の本棚にはたくさんの本がならんでいる。科学物から物語、歴史小説などいろいろだ。僕は今、本を読むことが大好きだ。でも一年前までは好きでも得意でもなかった。学校のリーディングテストでは、いつも平均レベルだったけれど、今年の学年末では、中学生初級レベルまで急上昇していた。僕の読書力がこんなに上達したのはなぜか。

ニューヨーク育英学園

それは、この一年間でいろいろな本をたくさん読んだからだ。僕はそれを誇りに思っている。

去年、担任のリチャードソン先生の教室に初めて入った時、僕は驚いた。部屋にもキャビネットのうらにも本がぎっしりだったからだ。先生はそれを全部読んだことがあって、僕たちが楽しめそうな本だけをそこに集めたと言っていた。先生は、「これから毎日、学校で一時間、読書の時間が、あります。宿題で毎日三十分読みます」と言った。僕はっきついなあ、できるかなあと思った。読む分野もクラスで話し合って歴史小説を五冊、伝記を六冊など、一年間で四十冊がクラス一人一人の目標になった。

それから毎日、僕は学校と家で本の課題に取り組むことになった。初めは何を読めばいいのか、自分がどんな本が好きなのか、全然わからなかった。だからとりあえず、先生がクラスで紹介してくれたアヴィという作家の

ニューヨーク育英学園

サイエンスフィクションを読み始めた。すぐにつまらないなあと思ったけれど結局最後まで読んだ。ハディックスの「ミッシング シリーズ」は面白くて、一冊四百ページ、八冊全部読んだ。

僕が一番心に残っている本は、ゴードン・コーマンの「アンギフティット」だ。先生が僕にすすめてくれた。なぜこの本を選んでくれたのか、教えてくれなかったけれど、読んでいるうちに、なんとなく理由がわかったよ

うな気がした。だいたいの内容は、人は全ての分野で一番へギフティッドじゃなくてもいいっていうことだった。

毎週、読書のノートに本の感想や考えたことを書くことも課題の一つだった。先生がそれを読んで、僕へのメッセージをいっぱい書いてくれた。毎月、クラスメートにおすすめの本について書いたり、次に読む本の計画を自分で立てたりした。最初は、「めんどくさいなあ」と思ったけれど、続けているとだんだん楽しくなってきた。

一年間で僕が読んだ本は、全部で四十三冊。目標を達成した。僕はリチャードソン先生のおかげで読書が大好きになった。今では自分の好きな本の種類も堂々と言える。それに読書を通して、自分のことがもう少しわかった気もする。どんなことでも最初は難しくても、最後までやり遂げたら、得意になったり、好きになったりすることもあるとわかった。

これからも新しい本との出会いが楽しみだ。

ニューヨーク育英学園

課題の読書を通して、本が好きになっただけではなく「自分のことがもう少しわかった気もする」と書いているところに多感な少年の心の成長が見られます。読んだ本の印象や考察が上手に表現されていて、何度読んでも味わい深い作品となりました。

小学校高学年の部　銀賞

My Well-Worn Jump Rope, Miho Masumura
Japanese Children's Society, NJ

歴史をもったなわとび

五年　増村　美帆

「きたないね、このなわとび。」こういうことを言われることがありますが、わたしはなわがきれるまで、何があってもこのなわとびを使い続けます。なぜなら、わたしのなわとびの歴史がつまっている、とっても大切なものだからです。

今のわたしのなわとびは、地面につくところが黒っぽくなっています。持ち手に近いところの縄と、色が全くちがいます。届いた時には、きれいなピンク色でしたが、それは持ち手に近いところにしか残っていません。これは、わたしの二年間の努力を示しているのだと思います。

二年生のころ、新しいなわとびが届きました。新品できれいなピンク色をしていましたけれども、新しいなわとびに慣れなくて、「こんなわとびイヤ！」と本当にいやがっていたのをわたしはよくおぼえています。しか

ニューヨーク育英学園

しだんだん慣れてきて、二重とびが上手になりました。

三年生のころ、前交差とびをがんばりました。学校でのなわとび大会で、歴代新記録を出したかったからです。学校で一週間に二回ぐらい体育があって、二回ともクラスで一番でした。クラスの友達に、「歴代新記録、絶対出せるね。」と言われながら本番の日をむかえたけれど、全くできなくてすごく悔しかったです。

ニューヨーク育英学園

四年生のころ、後ろ交差とびをがんばりました。去年の失敗を生かして、夏休みからがんばりました。最初は、顔になわが当たるんじゃないかとこわくてなかなかとべませんでしたが、ある日とつぜんとべるようになりました。こうしてがんばった成果が出て、二月十一日歴代新記録を出しました。五百三十九回。あの日は忘れることができません。

こうして努力を積み重ねたからこそ、こんなになわとびが黒いのだと思います。ここまでがんばってこられた自分が、わたしのほこりです。

ニューヨーク育英学園

黒くなってしまった縄跳びは筆者にとって努力の結晶です。それを見ながら頑張ってきた自分を誇らしく思い、今後他の分野でも同様に諦めず頑張っていくであろうと微笑ましく読むことができる作品です。

My Magic, Mizuki Hashimoto
Central Boulevard Elementary School, NY

ぼくのまほう

小五　橋本　みず希

ぼくは四才からピアノを習っている。練習は毎日一時間半。練習を休んだ日はない。毎日どんな練習をしているかというと、メトロノームを使ってゆっくり弾いてみたり、手首をまわすようにひく練習をしてみたり、楽ふに書いてあるとおりの指番号でひけるように、繰り返し練習している。

今まで人前でピアノを弾いたのは、二十回くらいあるけれど、一番印象に残っているのは、オーディションに合格して、四年生の冬にマンハッタンの教会でひいたことだ。

ぼくは教会に行ったのは、生まれて初めてだった。教会の中は静かで、教会のピアノは、やさしい音でよく響いた。弾いた曲は、ベートーベンのソナタ二十五番の第三楽章。積み木を一つずつ組み合わせるように、細かくていねいに演奏した。きん張したけれど、みんなの前でとても上手にひけて、練習してきてよかったなと達成感でいっぱいになった。

もしもこの世の中にまほうがあったら、ぼくはショパンのエチュードを弾けるようになりたい。激しくてかっこいい曲だからだ。その曲をみんなの前で弾いてみたい。しかし、もしまほうで弾けるようになっても、弾けるようになるための努力をしなかったら、達成感がないかもしれない。積み木を一つずつ積み上げて、何度くずれても、自分で積んでいけばやっとできたという達成感があるけれど、まほうで最初からパッと作り上げてしまったら、それはただ前からあっただけのようなものになって、ぼくの演奏にはならない。ぼくは、まほうに助けられなくても、ショパンのエチュードを弾けるようになりたい。

ぼくがいつもみんなの前でピアノを弾くと、みんなにおどろかれる。初めてアメリカの音楽の教室でピアノを弾いたとき、みんなに囲まれた。みんなはとても驚いて、たくさんほめてくれた。そのときのぼくは、まだ英語が

話せなかったけれど、ぼくのすごさがみんなに伝わった気がしてうれしかった。みんなに注目されて、アメリカの暮らしにも自信がついた。

もしかしたら、ぼくはもう自分のまほうを持っているのかもしれない。そのまほうとは、ピアノの力で人をひきよせる力だ。ぼくがピアノを弾くと、みんなが聞いてくれて、そしてそれが僕の力となる。これからももっとピアノの練習をして、そのまほうをもっと大きく育てていきたい。

ニューヨーク育英学園

ピアノは今回の応募作品の中で非常に多かったテーマの一つでした。その中でこの作品は、練習の末に上手に弾けた自分に焦点を当てるのではなく、ピアノの力で人を引き寄せる力に気づき、「ぼくのまほう」と位置付けたところに独自性が光っていました。

My Personality Trait, Ryuki Nakahara (6th grade)
Carrie Palmer Weber Middle School, NY

小学校高学年の部　銅賞

ぼくの性格

小六　中原　琉貴

ぼくのほこりは、探究心が旺盛な自分の性格だ。本で読んだ事や誰かに聞いた事などを何でも自分で確かめなければ気がすまない。有名な科学者達も、子供のころはそうだった。

例えば、以前、カビからペニシリンを発見したフレミング博士の伝記を読んだことがある。そして、パンにつくカビとご飯につくカビの違いを調べるために、それぞれ別の容器に入れカビを育てた。しばらくして、けんび鏡でカビを見てみたが、結局、違いは分からずにお母さんにいやがられることだけに成功した。

また、友達にまりもを見せてもらい「も」のことに興味を持ったこともある。その時は、池から「も」を採取して、けんび鏡で見てみた。けれど、何かを間違えたらしく、何も見えなかった。

それから、本に「牛乳にレモン汁を入れる

ニューヨーク育英学園

と、ヨーグルトのようになる」と書いてあり、作ってみると、本当にそうなった。今では、それに砂糖を加えて、ヨーグルトドリンクとして飲んでいる。

今は、クマムシの研究の準備をしている。クマムシは、大きい種類でも0・ハミリで、枯れたコケに住む。コケを一年ほど保管して枯らし、水をかけると、クマムシがいる場合は、休眠状態から目覚め、一時間ほどで歩きだす。今年の夏に、コケを採取したので、来年の夏が待ち遠しい。ただ、いつも、お母さんに、コケをゴミと間違えられ、捨てられそうになることが心配だ。

このように、ぼくはいつでも、読んだり聞いたりした事を、実際に、自分の目で確かめるようにしている。これからも、色々な事に興味を持ち続けようと思う。

この性格が、ぼくのほこりだ。

ニューヨーク育英学園

カビの実験、「も」の観察、牛乳とレモンのヨーグルトドリンク作製と、とにかくユニークで面白かったです。探究心旺盛な性格を誇りに思い続け、お母様にはちょっと我慢していただいて、今後も邁進してほしいです。

Baba-Nin, My Super Grandma, Kay Considine

Tenafly Middle School, NJ

中学校の部　金賞

ババニン

中二　コンシダイン　敬

ババニン。それは私のおばあちゃんのあだ名だ。まだ私が小学生のころだ。夏休みに日本のおばあちゃんに会いに行った時、みんなでバス旅行に行く事が決まった。山の名前はもう忘れたけれど、確か長野県の山だった。神戸から長野までのバス旅行は長かった。バスの中は暑くて、シートもかたかった。かなりディスカウントされたバス旅行だった。長野県に着いた時には私たちはもうへとへとだった。けれどそれからバスを下りて山を登る事になっていた。私はここで参加した事を後悔した。ただ一人元気なメンバーがいた。それはおばあちゃんだった。おばあちゃんはみんなの二倍のペースで山を登っていた。姿が見えなくなったと思ったら、ずっと先に一人で立って待っていた。知らないうちになんども先に行っていた。ババニンと言うあだ名はおばあちゃんの忍者のような素早さのおかげ

ニューヨーク育英学園

でついた。

おばあちゃんは足の素早さだけでババニンではない。おばあちゃんはいつも朝は一番に起きていて、みんなが起きるまでに朝ご飯を作っている。その上洗濯物も乾かしてある。家族のだれかが助けが必要な時には、おばあちゃんは必ずおかずを作って飛んで来てくれる。

ババニンのおばあちゃんはどうしてここまで頑張れるのだろう？

おばあちゃんは小さいころからかなり苦労していたと思う。七さいの時にお父さんが戦艦大和で戦死して、お母さんはその時から仕事に出た。おばあちゃんはそのころから弟と妹の世話をした。戦後の日本での生活はつらかったはずだ。一生懸命勉強して高校生になった時担任の先生に銀行などの会社に申し込むように言われた。しかし、お父さんがいないという事が分かると、そう言う就職先には全部断られると、担任の先生に言われた。おばあちゃんはその時そのような差別をうけてショックを受けたと言う。けれど、おばあちゃんはあきらめなかった。英語を勉強して、スチューデスになり国際線の飛行機に乗るようになった。

最近私は忍耐力と言う言葉を覚えた。ババニンのニンは忍耐力の忍でもあると思った。おばあちゃんは毎年私よりどんどん小さくなっている。それは我慢強く、苦労して来て体が削れていったようだ。そう言うババニンの

おばあちゃんを私は誇りに思う。

ババニンとは、忍者のように優れた身体能力があるおばあちゃんだという。そのエピソードが軽妙な筆致で描かれている前半にまず引き付けられました。しかし、後半は一転しておばあちゃんの生い立ちや境遇に言及してきます。この過去の経歴を書くことによってババニンのニンが忍耐のニンであるということが導き出されて来ます。つまり敬さんがババニンを違った角度からとらえ返すことでババニンがより立体的に描かれることになったのです。そこがこの作品のもっとも素晴らしいところだと思いました。多面的に描かれる人物を中心にした人間ドラマとして面白い作品に仕上がっています。

Carrying on the Torch, Caren Koo
Transfiguration School, NY

中学校の部　銀賞

中一　藤村　佳怜

継いでいくカタチ

私は生まれてから毎年夏に日本に帰っています。時々、「日本のおじいちゃんとおばあちゃんに会えるね。帰ってくるのを楽しみに待っているね」。などと周りの人に言われます。私が、私には祖父と祖母がいません。私が生まれる前に亡くなりました。小さい時は日本に帰ることは、祖父母に会うこと？、いないのはおかしいの？と複雑な気持ちでしたが、祖父母のように私を温かく迎えてくれる日本の家族や親せきがいます。

母の弟であるおじさん家族が私のことを待ってくれています。日本にいる間、よく遊びに行ったり、泊りに行きます。そしておじさん夫婦から祖父母を知ることがたくさんあります。毎年、お盆の初日に母とおばさんが作ってくれるうどん料理があります。なすと玉ねぎと油ふと言う地元の名物を使ったツンプルなうどんなのですが、これは長く伝わってきた味だと知りました。祖母がお盆の初日が誕生日で、まずしかったので曽祖母が誕生日のごちそうに作ってくれたそうです。そのうどん料理を私の母もおじさんも食べてきて、今でもその料理を受けついで、私に食べさせてくれています。「これはね、藤村家に伝わる味なんだよ。私も結婚してから知った味だよ」。と、おばさんがよく話してくれます。八十年近く続いてきたと思うと、こんなシンプルなうどんでもとても特別に感じますし、私も受け継ぎたいなと思います。

私のおじさんは自分の子ども時代の話で、よく祖父母のことを話してくれます。「かれんのおじいちゃんはおもちが好きで、よくおもちを食させられたんだよ。納豆もちが特に好きだったんだよ」。と、お正月でもないのに私がいる間、おもち料理をごちそうしてくれます。おばさんは「アメリカでつきたてのおもちなんて食べられないでしょ」。と言って、私のためにわざわざもちつき機を出してきて、

つきたてのおもちを用意してくれます。納豆もちなんてめずらしいのかもしれませんが、私は「これが祖父が好きだった食べ物だった」んだな」。と思いながらおいしく食べます。

小学校に入学する時、多くの人は新しいランドセルを祖父母からプレゼントされるのだと思います。私が小学校に入る前、おじさんとおばさんがランドセルを用意してくれました。「これはおじいちゃんとおばあちゃんが残してくれたお金で買ったんだよ。いなくなってもおじいちゃんとおばあちゃんからのプレゼントだよ」。と。だからアメリカに住んでても、育英学園に行く時は毎週そのランドセルを背負って、六年間通いました。「ランドセルいいね」。、「かわいいね」。と言われると、心の中で「これはおじいちゃんとおばあちゃんからなんだ」。とうれしく思ったものです。

日本から帰ってくると、同じように夏に日本に行って帰ってきた人たちから、おじいちゃんとおばあちゃ

んとおばあちゃんの家に行った、一緒に出かけた、これを買ってもらったという話を聞きます。でも私はうらやましいとか、祖父母がいなくてさみしいと思うことはありません。それはおじさんとおばさんが祖父母の話をしてくれたり、二人が生きていたら私に同じようなことをしたんだろうなと思う事を経験させてくれるからです。特におばさんは、結婚して他の家からやってきたのに、藤村家に伝えられている事を私にきちんと教えてくれ、いつもすごいなあと感心します。とてもフレンドリーに、「つけ物食べる？」とたくさんの食べ物を出してくれて、まるで祖母といっしょにいるみたいです。

こんなおじさんとおばさんがいることを私は誇りに思います。母も祖父母のことをたくさん教えてくれますが、実際に経験を通して教えてくれるのはこの二人です。小さなことだけれども、教えてもらった味や思い出は、しっかりと私の中に残して、将来自分の子ど

もに伝えていきたいです。そしてこれからもこの自慢のおじさんとおばさんから藤村家の習慣や伝統をたくさん教えてもらいたいです。

ニューヨーク育英学園

祖父母に代わって家族の歴史、思い出や味などを伝えてくれるおじさん、おばさんのことについてテンポよく描けています。冒頭から徐々に読み手を引き込んでいく優れた構成です。

My Family, Musashi Kuramoto
The Brooklyn Latin School, NY

中学校の部　銀賞

家族

中二　倉本　武蔵

僕は夏休みの宿題で出た作文のことを考えた時に、僕にとって何が誇りなのかずっと考えていました。小さい頃から、ずっとテコンドーを習っていることや、友達がたくさんいることなど、様々なトピックが頭に浮かびました。それでもこれというアイデアが浮かばず、ずっと悩んできました。

ニューヨーク育英学園

今年の夏休みに、テレビの取材を受けました。母が以前、僕の姉のことを本に書いたのですが、それを応援してくれているディレクターが、父と母に、再度取材したいとお願いしてきたそうです。これまでにも、僕たちの家族は、何度かテレビで紹介されましたが、アメリカで放送されたのは初めてでした。

僕の姉が普通の子供とは少し違うことを、僕は小さい頃から気付いていました。姉の治療や手術のために病院に一緒に行ったり、姉

だけは違う学校に行っていたので、何かが違うのだなと思っていました。

姉は、生まれた時から、目が見えなくて、心臓に穴が開いているなど、たくさんの障害を持っています。だから、小さい時から、僕と一緒に遊ぶことができませんでした。でも僕は下の弟や妹と一緒に遊んできたし、学校にも普通に行っていたので、あまり不自由を感じたことはありませんでした。

姉は、一人で起き上がったり、歩いたりすることが、ずっとできませんでした。十才になった頃に、両親は姉を寮のあるスペシャルスクールに入れる決心をしました。それまでずっと一緒にいた姉が、平日は寮生活になったので、両親はとてもさびしかったと思います。僕もなんだか物足りない感じがしました。でも、少しずつ姉のできることが増えて、手を引いたら歩けるようになっていったり、スプーンで食事をすることができるようになったことなどを見ていたら、ここは姉にとっても、とても良い学校なのだと思えるようになりました。

僕は弟や妹と一緒に遊ぶことができるけれど、姉は目が見えないので、僕たちが声をかけたり手伝ってあげたりしないと、何もできません。そんな時に、僕は自分が健康な体に生まれたことに感謝しなければいけないと強く思います。

僕が小さい頃は、僕達が特別な家族だという意識はありませんでした。両親は、できるだけ普通の家族と同じように、一緒に旅行に行ったり、外食をしたりする機会を作ってくれたので、僕は普通に幸せだなと思ってきました。

先日のテレビの取材の放送を見た時に、僕達は少しだけ特別だけれども、普通の家族と同じようにしても良いのだなと、改めて思いました。どんな家族にも色々な事情があるとそれでも家族みんなが幸せに暮らしていけることが一番大切だと感じました。

ようやく僕は、夏休みの宿題のテーマ「僕の誇り」の答えが見つかりました。それは、僕にとってっ大切な家族がいること」が誇りだということです。家族ですから、いつも一緒にいると、兄弟げんかもするし、両親に怒られることもあります。それでも、最後は家族が味方になってくれると思うと、安心することができます。毎日、おいしいご飯が食べられて、夜は寝る場所があることも、家族がいるからできることです。

ニューヨーク育英学園

僕には日本にもたくさんの家族がいて、夏休みにはおじさん、おばさん、いとこ達ともたくさん遊ぶことができました。こうやって世界中に家族がいることも、僕にとっては宝物です。楽しい時だけでなく、苦しい時やさびしい時も一緒にいてくれるのは、家族だと思います。僕は普段は家族がいるのが当たり前だと思っていましたが、姉が寮生活を始めてから、家族が一緒にいられないさびしさがあるからこそ、一緒にいられる時間はもっと大切にしなくてはいけないと思っています。

僕はまだ子供なので、家族に助けてもらうことばかりですが、少しずつ大人になっていくなかで、僕が家族にしてあげられることも増えていくはずです。これからはもっと自分から家族に対して助けてあげるようにしていきたいと思います。姉のことも、これからもできるだけ助けて、家族みんなで仲良く過ごしていけたらと思っています。それが、僕だけでなく、家族みんなにとっての誇りになると信じています。

ニューヨーク育英学園

自己と向き合い模索する中で徐々に気づいていく自分と家族との繋がり。その様子を淡々と綴っていますが、行間からは愛情深く思いやりに満ちた倉本さんとご家族の姿がとてもよく伝わってきました。

The Reason Why I'm Still Here, Akari Okita
Eastchester High School, NY

中学校の部　銅賞

私が元気でいられる理由

中二　大北　明里

照りつける強い日差しが優しくなり、冷たい風が頬に触れる。この季節になると、私は一年前の不安でいっぱいだった時の自分を思い出す。

アメリカに来て二カ月が経った頃、私は熱が続き、日ごとに歩けなくなっていた。車窓からいつも通りの町並を見ながら病院へ向かった。一通りの検査をした後、病院の先生はいつもより真剣な目差で私を見た。それから母と先生で別の部屋へ話をしに行った。こんなシーンをドラマや映画で見た事がある。病気の本人に直接伝えられない事を先に母へ伝えるのだ。一人で待っている間そんな事を思い、大きな不安が押し寄せた。部屋に寂しく響き渡る時計の秒を刻む音がとても大きく感じた。数分後、いつも通りの母が来て私はホッとした。来た道と同じ町並のはずなのに、さっきよりも町全体が元気に見えた気がした。

ニューヨーク育英学園

次の日、朝早く起こされた。ここ数日の間熱で学校を休んでいた私を、母はいつも私が起きるまで待っていてくれたので、何かおかしいと思った。母が言うには、昨日行った病院の先生から電話があり、血液検査の結果を見て大きな病院に行った方がいいと言われたらしい。昨日病院に行った時の道と比べて非常に薄暗く、見た事の無い道を、私は呆然と見ていた。着いた病院は、私の想像を遥かに越える大きさだった。案内係の人に道を聞き、私達は、緊急の病棟へ歩いて行く事になった。熱があっても、元陸上部で体力には自信のあった私には、余裕で歩けるはずの距離だった。しかし、十何歩か歩いただけで、私は持久走をした後のような感覚になり、立っていられなくなった。その時、私は自分が単なる熱では無いと悟った。何度か休憩を繰り返し、やっとの思いで、私達は緊急病棟へ着いた。体を動かさない限りはそれほど辛くない私に対して、そこには今すぐ処置が必要で、救急車

ニューヨーク育英学園

やドクターへりで運ばれて来た看者さん達がいた。こんなに重症な人がいる所に自分がいるなんて、病棟を間違えたのではないかと、待っている間ずっと思っていた。先生が来るまでベッドの上で父と母といつも通りの会話をした。父とは、「入院になるかもね。」と笑いながら冗談を言い合っていた。少し待つと、私のベッドの周りに十人以上の先生達が来た。看者さんを見る事に慣れていそうな先生から、まだ研修中らしき若い先生まで、たくさんの先生に囲まれて、ドキドキしながら多くの視線を浴びている事を感じた。それは昨日の病院の先生と同じく、みんな真剣な目差だった。先生達は私の様子を見た後、血液検査を行い、家族の中で一番英語ができる父に何かを話し始めた。私には何を言っているか全く聞きとれなかった。専門用語が多く、父にとっても難しい英語のようであった為、途中から通訳機を交えて会話を進めていった。私が分かった事は、自分が白血病で今日は入院するという事だった。その時、まだ私は白血病を知らず、入院した経験も無かった為、入院する事に、私は冗談が本当になったとのん気にも少しワクワクしていた。また、学校終わりに駆け付けて来てくれた兄が私にお菓子をくれて、私は不家より楽しさの方が多かった。しかし、父と母と兄の顔を見ると、見た事のないほど暗い顔をしていた。母が父と兄を家まで送っている間、私はスマートフォンで白血病について調べた。それは命に関わる病気で私の思っていた病気とは全く違っていた。しかし、私の目に一番に留まったのはそこでは無く、「完治する病気」という箇所だった。

次の日、医師から詳しい治療についての説明があった。完治するまでには二年ほどの期間が必要だった。まず、最初の約一カ月間は入院中に何度か手術を行う。そして、退院後も通院しながら抗癌剤治療を続ける必要があるという事だった。最初は、先生や看護師さんの言っている事が理解できず、治療も次は

ニューヨーク育英学園

中学校の部　銅賞

I'm Proud, Misa Sophia Kamiya Tanner
Japanische Schule in Zürich, Switzerland

プラウド

中三　神谷　タンナー　未咲　ソフィア

毎日学校から帰宅してきたときもそうだが、特に何週間か家を空けて、旅から戻り、我が家の敷地に足を踏み入れたとき、私はいつも「やっぱり家はいいなぁ。ほっとする。」と自然に顔がにやけてしまう。私は、スイスに住んでいる。

私が生まれる四年前、この家は完成した。父が子供の頃から育った私の祖父母の家の庭に、父が自分で設計し、自分の手で建てた。

この家には、父のアイディア、技術、情熱エネルギー、そして愛情がたくさん詰まっている。一番の特徴は、母がホームシックにならないようにと、取り入れた多くの「和」だ。玄関や窓、収納スペースなど、引き戸があちこちにある。居間と食卓の間には、欄間、襖カーテン代わりに障子、照明器具も父が和紙で手作りした。

どんな薬を入れるのか、いつ退院できるのか、不安だらけの毎日だった。薬の副作用で体が痛くなったり、吐き気や口の中の痛みのせいで、上手く食事ができない辛い日々が続いた。しかし、先生達は私でも分かる簡単な英語でゆっくり話してくれたり、看護師さんも手術前に私を抱きしめたり、仕事の合間に会いに来てくれたりしたおかげで、私はとても勇気づけられていた。また、母がずっとそばに居てくれたり、父と兄が仕事や学校終わりに会いに来てくれたり、たくさんの人に助けられたおかげで、このような辛い日々を乗り越えられたのだと思う。

今でも治療は続いているが、学校に通えるほど元気になる事ができた。こうして私が元気に生きられている事は、たくさんの人の助けが私を前向きにさせてくれたからだ。これらの経験から、私の誇りはどんな辛い時にも支えてくれる強い味方がたくさんいる事だと思った。

ニューヨーク育英学園

ニューヨーク育英学園

当たり前の日常を失っていく過程で、不安と期待を交錯させながらも自分を鼓舞していく様子が、豊かな語彙力と巧みな心象表現で丁寧に書かれています。さらに、深刻な状況に陥った時でも、それを記録映画のように淡々と冷静に書き記していく姿勢には感動を覚えました。総じて、抜群の筆力をもって書かれた作品です。

私にとっては、始めからこの状態だから、なんの違和感もないが、初めて我が家を訪れた人はみんな驚く。

しかし、家具は全部洋風。それも父の祖父母から受け継いだアンティークが多い。モダン趣味な兄は、

「博物館みたいだよ。こういうのどう？」

とイケアのカタログを広げて、両親に見せているが、両親は、

「自分の部屋は好きにしていいし、将来、自分の家を持ったら、好きなインテリアで、どうぞご自由に。」

と答えている。私も両親に同意見だ。家族の歴史や個性を大事にしているこの家が好きだ。

壁には、父の油絵やコラージョ、スケッチがいたるところに掛けられている。

我が家は庭も独特で、スイスにありながら、「江戸桜」が五本植えられている。これは母のふるさとの鎌倉山が桜の名所だから、という父の愛情の表れだ。そして、もちろん、父が子供の頃から慣れ親しんだりんごやなし、かりん、西洋すもものの木もそのままだ。秋の収穫時は大忙しだが、庭の果物からできる新鮮なフルーツジュースは格別な味だ。

祖母宅や父のアトリエとの間に、父は飛び石を敷いた。九十一歳になる祖母にとって、行き来が簡単にできるようになっている。

「スープが冷めない距離」どころか、熱々のスープを届けることができる距離だ。

父は、家族を思ってこの家を建てただけではなく、環境にも配慮した材料を使ったそうだ。自然素材やリサイクル品を多用した我が家は、冬は温かく、夏は涼しく年中快適だ。

家の周り半分は、縁側。その上には、すだれが下がっていて、それらも四季折々を楽しめる要素になっている気がする。

隣の家も、そのまた隣の家も土地を切り売りしてしまい、この辺りの自然はどんどん少なくなってきている。それは寂しいことだが、

小鳥が前よりも我が家に多くやってきているような気がするので、いいように考えるとしよう。

私は自分の家を自慢したいわけではない。私の家や庭に詰まっている家族の歴史や思いやり、愛情、自然と共存する生き方を親から知らぬ間に学べていたことを誇りに思っているのだ。

ニューヨーク育英学園

自宅を紹介していく過程で、家にまつわる家族の思いや歴史を辿っていくという書き方に引き込まれ、家族への愛が溢れるその家を実際に訪れてみたいと読み手に思わせる書き方ができています。

Paper Thin, Nina Bertacchini
Japanische Schule in Zürich, Switzerland

紙一重

高二　ベルタキーニ　ニーナ

私は日本人の母とスイス人の父を持つ、いわゆる「ハーフ」である。しかし、私は昔からこの「ハーフ」という言葉に引っかかっていた。なぜなら、「ハーフ」とは「半分」という意味で、かなり差別的であるからだ。これではまるで「ハーフ」は別の人種のように聞こえる。

見た目も日本人に見えない（らしい）私にとって、「ハーフ」であることが最大のコンプレックスだった。日本のデパートなどで感じる視線や、英語で話しかけられること、時には「外人」と呼ばれることが嫌でたまらなかった。そんな時は必死で自分の顔を隠す努力をした。マスクを付けたり、帽子を深くかぶったり、人前ではなるべく日本語を話すのを避けた。そのため、私は何度も他の国の血が混ざっていない人を羨んだ。にも関わらず軽々しく「ハーフって良いよね」と口にする

ニューヨーク育英学園

高等学校の部　銀賞

人に内心腹を立てていた。きっと「ハーフ」なら身長が高くて、英語が万能で、美人であるという誤った偏見を真に受けているからだ。しかしそれは違う。ハーフの皆が、テレビ番組に出演している、輝かしい存在ばかりではないからだ。

このように、「ハーフ」であることに対して多くの不満を抱いている私だが、そんな私にも、外国の血が混ざっているからこそ得したこともあった。

それはスイスで、私が母の代わりにゴミの処分をしに行った時のことである。

重く、今にも破れそうなゴミ袋を抱えながらゴミ集積所に向かっている途中、背後で誰かが日本語を話しているのが聞こえた。振り返ると、そこには同じく集積所に向かっている親子がいた。母親は片手にゴミ袋、もう片方の手でまだ幼い息子の手を握っていた。私は黙ったままゴミを捨て、話しかけようかと迷っていた。母親は私に見向きもせずに、息子に今晩の夕食について尋ねていた。私はちらちらと親子の方に視線を向けながら、家に帰る準備をした。そして歩き出した瞬間、もう我慢ができなくなって親子に話しかけた。もちろん日本語で。

母親ははっと顔を上げ、目を皿にして私を見つめた。しばらく気まずい沈黙が続いたが、それを破ったのは女性の方からだった。

「日本語話すの？」

私は頷いた。すると女性は満面の笑みを浮かべ、楽しそうに話し出した。私は、まるで温かい毛布に包まれたかのような温もりを感じた。

しばらくその女性と会話をしていると、彼女が母の知人であったことを知った。母と仲が良かったようだが、引っ越してから連絡が途絶えてしまったらしい。このことを家に帰って母に伝えると、母は嬉しさのあまり跳び上がった。それ以来、母は頻繁にその女性と会うようになった。

高等学校の部　銀賞

Is Common Sense Really Common?, Riko Minakawa
Ludwig-Leichhardt-Gymnasium, Germany

価値の大転換となった出来事を、スピード感のある文体で描き出しました。ゴミ集積所で高まりゆく気持ち、緊張の瞬間、勇気を持って一歩踏み出したことで起こった大転換、そしてニーナさんの決意が、生き生きと伝わってきます。
その気持ちを強く信じて、自分の道を悠々と進んでください。応援しています。

この運命的再会は、私が日本語を理解していたお陰で果たすことができた。今でも、あの時の母の喜びと幸せに溢れた表情を思い浮かべると思わず笑ってしまうと同時に、自分のことを誇りに思う。あれは神様が私に与えてくれたチャンスであったと言っても過言ではない。それほど嬉しかったのだ。

この先、英語で話しかけられたり、スーパーマーケットなどでの視線は続くだろう。しかし、私はもう無理に自分を小さくせず、堂々と胸を張って歩いて行く。見たい人は見れば良いし、英語で話しかけられても日本語で返せば良い。大事なのは日本語を話すことができる自分を誇りに思い、そのお陰で人を幸せにする力があることを知ることだ。そうすればいつしか自分のコンプレックスは自分の誇りになるはずだ。コンプレックスと誇りの差というものは紙一重なのだから。

ニューヨーク育英学園

「当たり前」は本当に当たり前か？

小さい頃から日本で生活してきた私にとって、海外での生活というのは常に新しく、刺激的なことで満ちあふれている。私が初めて訪れた国はアメリカで、中学二年生の春に二週間滞在した。その後、中学三年生の夏にオーストラリアにある姉妹校に三週間通い、現在は高校一年生の夏から一年間ドイツに留学している。これらの経験を通して、私は、外国では日本の当たり前が当たり前ではなくなることを実感した。ライフスタイルや食べ物、文化などあらゆるものが異なる海外では、日本の良さに改めて目を向けることができ、その度に私は一人の日本人として母国を誇りに思う。

ドイツに来てからまず私は、日本がいかにサービスを大切にする国かを学んだ。「お客様は神様です」という言葉があるほど、日本ではおもてなしの心を重んじ、様々なところ

高二　皆川　梨子

ニューヨーク育英学園

できめ細かいサービスが提供されている。例えば、飲食店に入れば注文をする前に水が出てくる。お店によっては、プレゼントを買うと綺麗にラッピングをしてくれるところもある。「いらっしゃいませ」や「ありがとうございました」、「またお越しください」といった言葉は、日本特有の文化といえるだろう。どれも形は違えどサービスであり、相手を思いやる心が表れている。一方、ドイツに限らず他の国でここまでのサービス精神を感じる

ニューヨーク育英学園

ことはまずなく、店員と客はあくまでも対等の立場だ。日本のサービス業というのは、相手への敬いと思いやりの心によって成り立っている、他国には真似できない誇りの一つだ。

二つ目に気がついたのは、街の美しさだ。ここでの美しさというのは、風景ではなく清潔さを表す。嬉しいことに世界には親日家が多く、ドイツもまた例外ではない。私が留学中に出会った人の中には、日本へ旅行に行ったことのある人が何人かいた。彼らに印象的だったことを尋ねると、必ずといっていいほど

日本は本当に美しかった。風景だけではなく、街にゴミがなくて驚いたよ」。と、口を揃えて街の清潔さについて話してくれたのだ。

ドイツの街を歩いていると、多くのタバコの吸い殻や空き缶が目につく。一度旅行でオランダを訪れた際にも、オランダ国内で大きなサッカーの試合があった翌日のアムステルダムは、ゴミで溢れていた。これらの国々には街に公共のゴミ箱がある。にも関わらず、

ニューヨーク育英学園

人口が多くてゴミ箱の数が圧倒的に少ない日本の方が明らかに清潔だ。なぜなのかと質問されることも珍しくなく、私はドイツで自分なりの理由を考えてみた。

日本には防犯上の理由からゴミ箱があまり置かれていない。それでも街が清潔に保たれているのは、日本人は自分のゴミに責任を持つからではないかと考える。つまり、自分が

汚したら自分で片付けることが習慣化しているということだ。

最も良い例として、学校での掃除が挙げられる。日本では小学校から高校まで、休み時間や放課後を利用して毎日掃除を行う。長期休みの前後には大掃除の時間があり、わざわざ制服から体操服に着替えて掃除をすることもある。そしてそれらは、私たちにとってごく当たり前の学校生活の一部だ。

しかし、私が通っていたオーストラリアやドイツの学校では、生徒たちが掃除することはなく、すべて清掃業者が行う。現在私が通っているドイツの学校では、四月に卒業を祝うパーティーが行われた。その時に在校生は顔や髪にグリッターをかけられたのだが、その数日後でも校舎にそれが散らばっており、日本ではありえない、と思ったことをよく覚えている。掃除は自分たちの仕事だと考える日本の生徒と、そうは考えない海外の生徒との間では、ゴミに対して自然と異なった捉え方をするようになるのではないかと考える。

そしてその捉え方というのも、私たち日本人が先人たちから学び、受け継いできた誇りといえるのではないだろうか。

それぞれの国には、それぞれの良さと欠点がある。日本も働き方や多様性など、他国を見習うべきところは多い。しかし日本のおもてなしの精神に触れ、清潔な街を歩き、それが当たり前として成り立つその事実を客観的に見つめてみると、やはり自分の母国は素晴らしく魅力に満ちた国だ、と誇りを持って言えるのだ。

ニューヨーク育英学園

ニューヨーク育英学園

幾つかの外国暮らしの中で気付いた日本の美点を、明快な文と構成で書き上げました。「当たり前」を問うてその価値を見直す作業、特に後半の考察は、着眼も深さも素晴らしいです。洞察力に優れ、物事を慎重に検討していく皆川さんの様子が、堅実な文章から伝わってきます。是非これからも当たり前を問い続けてください。

特別賞

My Slime, Sakura Ogawa
Joseph A. Edgar Intermediate School, NY

私のスライム

小四　小川　桜

私がほこりに思う事はスライム作りです。

最初にスライム作りにきょうみを持ったのは去年でした。ユーチューブのボンボンTVでスライムを作っている動画を見て、自分もやってみたいと思いました。お父ちゃんにお願いして、材料を買ってもらいました。最初は何度か失敗しました。でも今では色々な種類のスライムを何でも作れます。私の部屋はスライム作りの材料と道具と失敗作のスライムでいっぱいです。

今ではスライムを売れるほど上手になりました。友達が私の作ったスライムにさわると、自分の欲しいスライムをリクエストしてきます。今までリクエストを受けて、数えきれないほどのスライムを作って、友達にあげてきました。今では学校の中でスライムマスターとして有名で、友達の友達や、他のクラスの子からも、リクエストが来るようになりました。最近注文が多くて夜までスライムを作っていて、お父ちゃんに「早く寝ろ」と怒られています。普段はあげているのですが、時々お礼にお金をもらうこともあります。それが私のおこづかいになる事は、お父ちゃんに秘密です。

今までスライム作りに使ったお金はおそらく三万円を超えていると思います。使っている材料もどんどんアップグレードしていきます。例えば光るグルーや色の変わるグルーを使うと、キレイな色に光るスライムになります。お父ちゃんのツェーピングクリームをもらってスライムにまぜると、白いフラフィースライムになります。学校では、フェイクスイーを入れたクラウドスライムや、青いとう明なスライムにラメを入れたスライムが人気です。

スライムにハマる前は、スクイーズにハマりました。日本へ帰国した時に、お父ちゃんにお願いして、わざわざ日本スクイーズ協会という所に連れて行ってもらって、スクイー

ズ作りをしました。でもスライム作りはもうすっかり自分一人でできます。スクイーズ、スライムの次は、何作りにハマるのか、今から楽しみです。

何かキレイでカワイイ物を自分で色々試しながら作るのが大好きです。そしてそれを友達が喜んでくれるのは、とっても嬉しいです。これからも色んな物を作って、みんなを喜ばせたいです。

ニューヨーク育英学園

興味を持った物作りに夢中になり、何度も試作、失敗を重ねながらも、スライムマスターと呼ばれるまでになった桜さんの人柄が、読む人の心をぐっと魅きつける楽しい作品です。大好きな「物作り」で友達に喜ばれ、それを誇りとするのは素敵なことです。

NY 育英学園 NJ キャンパス
裏庭（春：八重桜満開）

特別賞

My White Handkerchief, Helena Kottman
The Manitou School, NY

小さな物語を読んでいるような気がしました。平易で簡潔な文章が物語の舞台や環境だけでなく、そこに登場する人物の人柄や雰囲気を見事に描き出しています。それはヘレナさんの文にはヘレナさんの断片というか人柄がどこかに入っているからだと思います。そして、それがヘレナさんの語る力となっているのです。この作品の魅力はまさにその語る力にあると感じます。

白いハンカチ

中二　コットマン　ヘレナ

私の誇りは、友達です。そして私の友達との友情です。

私はとっても小さい学校に行っています。マニトゥーと言う中学生が十三人しかいない学校です。そして、ほかの学校でいじめられた子がたくさんいます。だから、いじめる人はだれもいません。みんないい子です。

ほかの学校では、けんかがあったら、逃げるのが簡単です。マニトゥーでは、解決しなければならないのです。なので、みんなが解決する事が上手です。

ニューヨーク育英学園

友達の中では、私の役割は母さんぽい、「ママ・ベア」です。つまり、だれかが大きくなったり、いい事ができたら、私が一番ほめる人です。私はこの役割が好きです。そして、友達が私の事を好きだと思っている事もとっても大切な事だと思っています。

私はおばさんといっしょにカリフォルニアで白いハンカチを買いました。なぜなら、だれかが泣いてたら、そのハンカチをぜなら、だれかが泣いてたらいいなと思ったからです。なので、毎日学校にその白いハンカチをもっていました。シャツのポケットからコサージュみたいにしてよくもって行きました。けれど、チャンスはなかなか来ませんでした。

そして、学校の終わりの日、校長先生が泣きました。チャンスでした。「サッ」とポケットから出して、先生がもっと泣き始めました。けれど、白いハンカチがあったから大丈夫でした。これが私の誇りです。

ニューヨーク育英学園

そして、校長先生が、こんなにいい子ばかりの学校の校長先生でいられて、先生にとってもの誇りだったと言われました。

私の友達との、校長先生との友情が大切な私の誇りです。

NY 育英学園 NJ キャンパス
玄関脇（秋：色づく木々）

NY 育英学園 NJ キャンパス
グラウンド（冬：雪で真っ白）